

# 多様性を認め合える地域社会を目指して

NPO法人 Teto Company 理事長  
SOGIE サポートチームココカラ！共同代表

奥 結香

私は今、大分県竹田市という人口約2万人、高齢化率46%程の小さなまちで地域コミュニティ「みんなのいえカラフル」を運営しています。2018年10月に開所し、1年間で4500名を超える来所者がありました。みんなのいえカラフルは誰でも気軽に集い自由に過ごすことができる場所です。



みんなのいえカラフル

0歳～100歳を超える方まで、年齢や性別、認知症や障がいの有無に関わらず、時には海外の観光客まで集い、昼食を作って食べたりゲームをしたりボーっとしたりして過ごしています。ここでは何かを必ずしなければならないという決まりはありません。常連の来所者が他の来客者を出迎えてくださっていたり、高齢の方の肩を揉んだり自然と助け合いが生まれています。「そのままのその人でいい」という雰囲気づくりをこころがけています。

私は今、“ひとりぼっちのいない社会をつくる”をビジョンに掲げ、インクルージョン・共生社会をテーマに活動をしています。その中の一つがセクシュアリティに関



カラフルの活動

する活動です。仲間と共に、性的少数者と呼ばれる方々の当事者交流会を主催したり大分県内で啓発活動やアンケート調査を実施し県知事に要望書を提出したりするなどの活動をしています。

私自身も性的少数者側に当てはまる人間のひとりです。

## “普通”の恋愛をしたかった学生時代

初恋は中学1年生の時。相手は同じクラスの仲良しの女の子でした。

「明日、もっと話せるといいな」「交換日記できて幸せ！」「一緒に帰りたかったなあ」と、初めて人を好きになった嬉しい気持ちで心はいっぱいでした。

でも、この事実を周りに話すことはできません。世間で言われる“普通”と異なっていることはわかっていたので時間が経てばたつほど、好きな気持ちが強くなるほど、苦しきの方が強くなっていきました。

周りに気づかれたくなく私自身も異性のことを好きになりたいという気持ちだった

ので、自分自身にも周りにも嘘をつき、好きな男の子を決めて周囲と話を合わせていました。

当時、12歳でしたが、それまで生きてきた過程の中で「異性を好きになることが普通」「同性を好きになるのはおかしいこと」「女の子は女の子らしく」「男の子は男の子らしく」という言葉を聞いてきたからこそ、その枠に当てはまらない自分自身はダメだと思ったのだと思います。

中学校2年生の終わりに家庭の事情で、住んでいた愛知県から大分県に引っ越ししました。

初恋の相手と離れることは辛かったです。これでいい…これでいい…と何度も心の中で唱えたことを覚えています。これで私はやっと“普通”になれる！という思いでした。

それから1年後。高校に入学して、かっこいい先輩のことを好きになりました。テニスが上手で堂々としていて…。

でも、その先輩の性別も女性でした。

その先輩とはお付き合いもしたのですが、周りにどう思われるのかが怖く同性同士でお付き合いしている自分に対して自己嫌悪のような感情が付きまといました。母親に直接カミングアウトしたわけではありませんが、自分自身のセクシュアリティが原因で喧嘩が増えました。

ただ、一つ胸を張っていえることは、人を好きになることや好きな人と一緒に過ごせる瞬間はとても幸せだったということです。

1年程お付き合いしましたが「将来結婚できないし子どもも産めないよね」という理由でお別れをしました。

結局は“普通”でなければ幸せな未来を描くことはできないのだと思い込み、高校を卒業してからは恋愛対象が同性だということのを隠すようにしました。隠していたというより、同性とお付き合いしていた過去のことにはなかったことにしたいから封印しようという感覚に近いかもしれません。

結婚をして幸せな家庭を築くことに対しての憧れと、そうならない現実。自分でもどうにかしたくて異性とお付き合いしてみたり、スナックでアルバイトをしたり、婚活パーティーに参加してみたり…とにかく男性に対しての苦手意識をなくしたい一心でした。

本当の自分は、いつも置き去り。私自身も本当の自分を無視して生きていました。自分の中で生まれた大切な感情を潰しているのですから、今振り返るとしんどかっただろうと思います。本当のことを知られてはいけないと思い周りの人たちにバリアを張りながら表面上のお付き合いをしていました。

## SNSに救われた過去と、現在の活動

私が自分自身を受け入れることができるようになった1つのきっかけが、当時流行っていたmixiというSNSです。

それまでは、リアルに繋がることができない人同士の中での生活でしたが、SNSとの出会いによって世界が広がりました。同じような悩みを持つ方がいることを知り、同性同士でも幸せそうに暮らしている恋人同士がいることを知ったのです。

同じ性的少数者に分類される友だちができたたり恋人ができたたりと、一人じゃないという気持ちを少しだけ持つことができました。

仲間と一緒にいる時だけ、自分自身が性的少数者であることを忘れることができました。

それから約5年後。関西でSOGIE(LGBT)<sup>※</sup>に関する活動をされる方と会う機会があり、大分の現状をお話したところ「大分にはサークルや団体が一つもないの？」と驚かれました。そのことがきっかけとなり虹色おおいたというサークルをつくり、当事者交流会などを主催しはじめました。こっそりと。

大きな転機は2016年2月、「同性愛隠さない」という見出しと共に、名前や顔写真が地元の新聞社に取り上げられたことです。

新聞を通しての大々的なカミングアウトでした。

新聞に掲載されるということは不特定多数の方に自分自身のセクシュアリティを知られるということです。そのため、新聞記者さんから依頼を受けた時非常に悩みました。異性愛者の方が人前でわざわざ、「異性愛者です！」という宣言をすることがあるのでしょうか。きっと多くの方は無いと思います。

違和感を抱きながらも、最終的には使命のようなものを感じ取材を受けることにしました。顔写真を掲載したほうがリアルに感じられると思い顔写真の掲載も許可しました。

私のセクシュアリティが原因で、母が誰

かに何かを言われる可能性もあるので、取材の前には母にも相談をしました。母は私に「あなたのマイナスにならなければいい」と言いました。高校の時に私のセクシュアリティが原因で喧嘩が増えて、理解し合うことができずにいた10年間。この時はじめて、母に自分自身を受け入れてもらえたと感じました。

新聞掲載の当日の朝は、ベットの上で身体をまるめてうずくまっていたことを覚えています。今までずっと隠そうと思っていたことが知られることで、自分の周りには人がいなくなるかもしれない…それが怖かったのです。

記事に関しては多くの反響がありましたが一番多かったのは応援のメッセージです。また、これまで繋がっていた方々からもそうでない方からも「私も性的少数者側です」という連絡や相談を受けました。身近にいたのだということが衝撃でした。

なぜ、何も悪いことをしていない人たちがこんなに肩身の狭い想いをしないといけないのだろうという社会に対しての疑問がわき、仲間と共にSOGIEサポートチームココカラ！を立ち上げ、現在に至ります。

地元の新聞やテレビに活動が紹介されることが増え、私自身もSNS上で発信を続けています。ほとんどの方が私自身のセクシュアリティについて知っている状態なのですが、自分から個人に向けてカミングアウトをすることはほとんどありません。

正直な気持ちを言えば、これだけオープンにしても、誰かに否定される怖さというを感じているし自分の活動を誇りにも思うこともできていません。セクシュアリティはただの私の一部です。その部分のみに焦点を当てられて「私＝レズビアン」

のイメージがつくことはあまり心地よくないことでもあるのです。すぐに社会が変わることはないかもしれませんが、コツコツと活動を続けて、いつか、このような活動をしなくてもよくなる社会になってほしいと強く願っています。

## 多様性を認め合える地域社会を目指して

性的少数者に限らず、社会の中で少数者・弱者と見られることによって生きづらさを感じている人は多くいます。差別・偏見をなくすアプローチはいくつもあるかと思いますが、私は“自然に”ということを感じています。その実践の場が地域コミュニティ「みんなのいえカラフル」です。

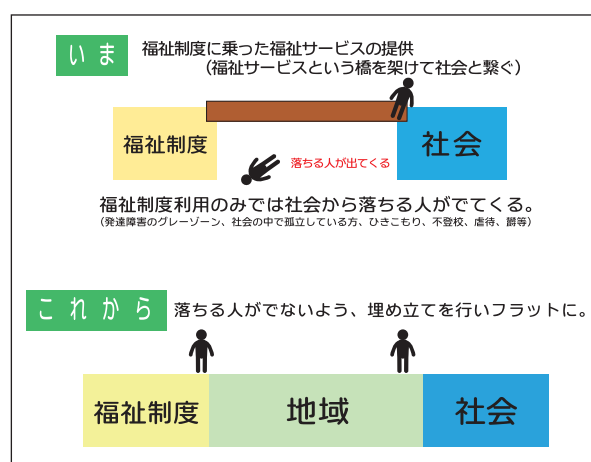
みんなのいえカラフルの原点は20歳の時に、障がいのある方の入所施設で介護福祉士として勤務していたことです。その時に、重度障がいのある方の生活の質に関する課題や、地域や社会との接点の無さ、そして社会から差別・偏見の目を向けられる存在だと感じる場面があり、現在の福祉の在り方に疑問を感じるようになりました。福祉を変えていきたいという想いを抱き10年間は福祉・教育の現場で経験を積もうと心に決め、NPO法人で発達障害のある未就学児・児童の支援員、特別支援学校教諭、青年海外協力隊として活動をしました。

それらの経験を通して見えてきた福祉に対する課題は以下の4点です。

- ①ケアされる側・ケアする側がはっきり分かれており、上下関係が生まれている。そのことで本人の主体性や能力を奪う可能性が生じている。
- ②福祉制度を使っていないけれど困っている人(福祉制度にのらない困りごとや福祉制度の利用方法がわからない人)はい

る。その逆で、制度に縛られて困っている人もいる。

- ③福祉サービス(公助)は必要であるが、インフォーマルな社会資源(地域の中での繋がりや助け合い・支え合い〈互助・共助〉等)が希薄になる可能性もある。
- ④縦割りの福祉制度(障がい者は障がい者施設、高齢者は高齢者施設、子どもは児童の施設等)により、多様性を知る機会の損失となっている。その結果、差別や偏見が生まれやすい。



上記のような課題が見えた時、制度による橋渡しのサポートではなく、福祉と地域をフラットにすることや、そのための居場所づくりをする必要があると感じました。

学校現場でもなく福祉施設の中でもなく、地域に焦点を当てて多様な方々がつながるきっかけの場・支え助け合いが自然と生まれる場所をつくりたいと決意し、今に至ります。



みんなのいえカラフルの来所者の中には認知症の症状がある方や自分の物忘れや老化現象に不安を感じている高齢者がいます。その根底には、迷惑をかけたくない、できない自分はダメだという想いがあるようです。「迷惑をかけてもいい。」「できない部分は誰かが代わりにやるから大丈夫。」というメッセージを言葉や態度でお伝えするようにしています。スタッフが失敗した時にも「ま、いいか」と笑いに変える雰囲気を大切にしています。周囲に迷惑をかけるのではないかと気を遣い、これまで通っていた習い事やサロンへの集まりに参加しなくなった高齢者が、カラフルにくることだけは楽しみにしてくださっています。

他人の目や誰かの評価を気にして胸をはって過ごすことができないことは誰にでもあるのではないかと思います。それはもったいないことだと思います。そうならないためにも、安心して失敗し、安心して挑戦ができる雰囲気づくりを心がけています。

### 人の一部分でその人を決めつけてしまわないように

年齢・障がいの有無やその人の持つ背景に関係なく同じ空間で過ごしているうちに、自然とお互いを認め合えるような居場所…これがインクルージョンな社会を実現するための小さな手段の一つだと考えています。

人間はもともとグラデーションのようなものだと感じています。見た目も能力も学び方も性格もひとりひとり違いますが、社会が決めた基準により線引きされ健常者・障がい者と二分割されてしまったように思います。セクシュアリティに関することも同じだと思います。

「認知症の人」「自閉症の人」「LGBTの人」等…人は相手の見えやすい部分のみを見て

判断してしまうからこそ、マイノリティがより、マイノリティになっていくのだと思っています。ですが、共に過ごすことで相手の色々な部分が見えるようになれば、「別の人間」ではなく、「自分と同じ人間である」という当たり前のことに気づくことができると考えていますし、そんな雰囲気を自然と生み出すことが目標です。

色々な人がいて、それでいい。色々な人がいることが認められている空間というのは、自分自身がどんな状態になっても“そこにいていいのだ”と思うことができる空間なのではないでしょうか。インクルージョンな社会は、そのままのその人で生きていていいのだと思わせてくれる温かい社会であり、互いの違いを認め合えることによって自分自身も認められるようになる社会なのではないかと考えています。

そのような社会を目指して、これからも活動を続けていきます。

※ SOGIE とは

SO→ Sexual Orientation (性的指向) の略。

GI→ Gender Identity (性自認) の略。

E→ E は Gender Expression (性表現) の略。

## プロフィール

**奥 結香**  
(おく・ゆいか)



NPO 法人 Teto Company 理事長

SOGIE サポートチームココカラ！共同代表

1987年生まれ。地域福祉の可能性を感じ、竹田市にて赤ちゃんから高齢者まで障害の有無に関わらず共に過ごすことができる地域コミュニティ「みんなのいえカラフル」を運営しながら多様性・共生社会についての発信を続けている。また、セクシュアリティに関することで悩む人が多い現状があるため、SOGIE (LGBT) サポートチームココカラ！を立ち上げ、大分県内にて啓発活動や交流会を実施している。